「いま何をすべきか伝えたい」

漁港と女川町の現状を見て 被災地のためにできることは

15日、ボランティア参加者が石巻漁港や女川の状況を見ました。テレビを通じてみたものとの実態の差に衝撃と同時に、進まない復興の現状を見て、憤りも感じたそうです。

「半年経ってまだ瓦礫がたくさん残っている。もっとボランティアが必要」「何を生かし、伝えれば良いか考えたい」「政治がもっと迅速に対応しなくてはいけない。被災地のためにできることを考えたい」――p現地を見たボランティアの人の感想です。

被災者の想い　漁師「やれるものなら、またやりたい。でも･･･」

14日にボランティアセンターのスタッフが事務所の前で作業をしていると、70代の男性が話しかけてきました。その男性は「3回くらいここを通り過ぎたけど、今日は外に人がいたから話しかけてみた」と話し始めました。

事務所の中にいたスタッフ全員で話を聞きました。

その男性は漁師で3月11日に地震の後、自宅近くの山に逃げて自分の家や船が津波で流されるのを黙って見ていることしかできず「本当に情けなかったねぇ」と涙を浮かべながら話してくれました。

スタッフが「また漁師をやりたいですか？」と質問すると「あぁ、やれるならやりたいねぇ。でも、船も漁具も全部流されてしまって、国からの補助は何にもないし、もうできねぇ」と肩を落としました。

そして、最後に「共産党と関わったことがなかったが、こんなに話を聞いてくれた。このことはみんなに話すよ」と笑顔で帰っていきました。

自転車 災対連 石巻に 寄贈

川崎市から 100 台の自転車が災対連(石巻)に寄贈されました。放置自転車で引き取りにこないものを、再整備したもので、カギも 100 個寄贈されました。ひとつひとつに被災地応援ステッカーが貼られています。ご希望の方は、災対連絡に連絡しますので、お声かけください。

ポスターを見て、「被災地の役に立ちたい」

都内に貼られたボランティア募集のポスターを見て、民青同盟東京都委員会に連絡してきた横浜在住の H さん。草刈りボランティアのあと、感想を話してくれました。

毎日一日一日の積み重ねが大事。プロの草刈りを仕事にしているかたがいたので、すごく早く進みました。(笑)

みなさん、やさしい方ばかりなので、一人での参加で不安はありましたがすごくうれしいです。ボランティアで流す汗は気持良いです。

（横浜　H　24 歳）

ボランティアセンター前で

#80 救援・復興！ボランティアニュース

発行：日本共産党　震災・救援対策センター
石巻市南中里４－７－１７　TEL：22-6335 FAX：22-6892